ICT を活用した学級集団の人間関係づくり

－友人サポート感の向上を目指して－

学籍番号　219207
氏　　名　片桐正道
主指導教員　梅川康治
副指導教員　小松孝至

１．背景

近年、いじめ、不登校や問題行動が増加傾向にある（文部科学省，2021）。これらは学校現場における大きな課題の一つである。近年、いじめ、不登校や問題行動が増加傾向にある要因の一つに、児童、生徒の対面でのコミュニケーションが不足していることや人間関係の構造が急速に変化していることによる対人関係の問題にあるのではないかという考え方もある。対人関係の問題を解決するための様々な方法が検討されているが、とりわけ、児童、生徒の適切なコミュニケーションスキル及び社会的スキルの獲得が、良好な人間関係を築くため、より一層求められているのではないだろうか。

社会的スキル訓練（SST）や構成的グループエンカウンター（SGE）は、確立された原理や構成によって、よりよい人間関係づくりを目指した取り組みとして、すでに多くの研究者によって実践され、またその効果が実証されている。

２．実習校の現状と課題

実習校は、一小一中から成る義務教育学校の中学部であり、9 年間同じ同級生と共に学校生活を過ごし、人間関係が固定化しやすいということが分かった。また、複数のクラスでは、人間関係の固定化により、学級内では特定の親しい人間以外から援助を求めることが難しいのではないかという複数の教員からの情報もあった。特に授業などの学習場面において、分からない問題や授業の進展状況に疑問があっても特定の友人以外には質問することが出来ない生徒が多く見られた。そこで、本実践課題研究では、学級集団における友人サポートの向上を図ったトレーニングの検討・実践とその効果を検討することを目的とした。

３．トレーニングの実践

人間関係を再構築させ、学級集団の友人サポート感を高めるためには、生徒間の相互の理解を深め、また生徒の積極的な自己開示を促す必要があると考えた。また、実習期間中

は、新型コロナウイルスの感染拡大等の社会以上性の変化によって学校現場の様々な場面でみられた。そこで、ICT を多く活用することで、現状の学校現場にとって最適化されたトレーニングプログラムの考案・実践を行った。一回を 40 分と想定し、全４回のトレーニングプログラムを作成した。トレーニング内容は構成的グループエンカウンター事典（國分　2004）を参考に考案した。トレーニングプログラムの効果測定として、山田・米沢（2011）が作成した「ASESS」をトレーニング導入前と導入後に実施し、「ASESS」の項目のひとつである「友人サポート」の得点を比較することで効果を検証した。また、各トレーニング終了後に、参加生徒が考えたことや思ったことなどを記入したフィードバックを整理、分類することでトレーニングプログラムを評価することにした。

４．トレーニングの結果

今回の実践では、トレーニングプログラム実施前後での ASESS の友人サポート感の得点比較では、学級全体での有意な効果は検証することが出来なかった。その一方で各個人の ASESS の検証からはより友人からのサポート感を高める一定の効果があったのではないかと考える。

生徒のフィードバックからはトレーニングを通じて、クラスメイトへの認識を再構築するきっかけとなったという記述や他者へのより深い理解を図ろうとする記述が見られたほか、他者からのポジティブな言葉を受け取ることによって、自己評価を向上させるような振り返りが見られた。また、これまでの自分自身の言動を顧みる回答や、多面的に物事をとらえようとする回答が多く見られたことからも、日常的に困難さを感じていたことや必要としていた社会的スキル、コミュニケーションスキルに焦点をおいた取り組みができたのではないかと評価した。

また、トレーニングプログラム中の生徒の様子からは、ICT の活用によって生徒のより多面的な視点からのフィードバックや積極的な自己開示を可能にしていることが示唆された。

５．総合考察

今回の検証結果を通じ、生徒たちの人間関係や対人関係スキルはより複雑化、多様化しており、生徒同士の相互にサポートし合うためには、サポートを要求する側だけでなく、サポートする側にも働きかけていく必要であることが示唆された。今後は、サポートする側とされる側の双方に必要とされるスキルの獲得を図る取り組みの、検討を進めていきたい。

また、本実践課題研究では約１か月間に渡り全四回のトレーニングを進めてきた。しかし、より継続的な児童生徒との関わりの中で、生徒同士の支援性を学級全体で高めていくためには、回数はもとより更なるトレーニング内容の改善と調査の工夫を進めていく必要があると考える。また本実践は近年の社会情勢等を考慮し ICT の活用を積極的に図ったが、これまで一般的に行われてきた SST や SGE との違いや効果をデータに基づき検証を進めていく必要があるのではないかと考える。今後は、これらの課題について継続して探求していく必要がある。